

デイスカッションの要約

公開シンポジウム「宗教の創りだす絆——信仰による交わりの意義と可能性」では、中道基夫関西学院大学准教授より「Indigenization, Inculturation から Interculturation へ」、渡辺順一金光教羽曳野教会長より「繋がり喪失の時代における宗教運動の課題——「宗教」を人々の「痛み」の側にどう開いていくのか」、三木英大阪国際大学教授より「宗教的ニューカマーと地域社会——外来宗教はホスト社会といかなる関係を構築するのか」、小杉泰京都大学教授より「現代宗教としてのイスラーム——世界的なウンマとモスクを中心とする地域コミュニティ」の順で講演がなされ、それを受けて聴衆との間で質疑応答が行われた。質疑は、会場から寄せられた質問紙に記された質問、意見に応える形で行われた。主な内容は以下の通りである。

渡辺への質問…ローカルな支援は大切だが、日本人宗教者はグローバルなビジョンを持ってグローバルな行動まで考えねば、諸宗教が手を握ることはできないのでは。

渡辺…全く同感。諸宗教に出会うことによって自分にはないビジョンやその表現の仕方、特異な資源などに気付かされることが多い。ただし自分でできることは、ローカルな人たちでしかできないので、その連携のなかで大きな目的を確認してゆく、その意味でグローバルさは大切である。あえて「小さな」と言

ったのは伴走的な、寄り添ってゆくような受身の支援というのがこれからの時代に非常に大切になってくるのではないかということをお願いしたかったためである。それは量の論理では語れないもので、構造的な能動的な実践だけでは掬いきれない。個々でできることは小さいので、できるだけたくさん宗教やそれ以外の団体と連携して、大きな働きをメッセージとして作り出してゆくといった戦略が必要ではないか。

三木への質問…ニューカマーと日本人社会とでは、信仰抜きで媒介者が必要としているのは誰か。日本の地域社会はニューカマーをそっとしておくという態度をなかなか崩さないのでは。

三木…ブラジル人教会であれ、モスクであれ、あからさまに地域との交流を欲しているというところには出会っていない。大阪のあるモスクでは市民活動家が媒介者の役割をしていて、地域との交流が活発であるが、これは珍しいケース。そのケースでもモスクの側が要請したわけではなく、むしろ市民活動家の人に引く張られてきた。その意味で、現時点ではモスクもブラジル人教会も媒介者が必要としているとはいえないし、そういった意識も無いのでは。しかし将来的に考えた場合、もともと日本と関わりたいという思いが強まって、媒介者を求める声も上がってくると思われる。おそらく移民の第二世代の中からそうした人たちが現れるのでは。

三木への質問…同じ宗教を共有していても、ニューカマーと日本人信徒の間に言葉の壁があって、交りは難しいようであるが、どのように対応すべきか。

三木…現実には言葉の壁があり、確かに信者同士でも交わりは難しい。ブラジル人教会はニューカマーにとってポルトガル語をしゃべりまくれる場となっている。そして日本人信徒はポルトガル語がしゃべれないので、そうした場にはなかなか参加しきれない。ただしブラジル人教会では若い人たちが礼拝で聖歌の時バンド演奏する。そうした若者は日本での学校教育などで比較的日本語がしゃべれて、日本人との接点も多い。そうした若者が育ってゆく中で交わりも広がるのでは。

小杉、三木への質問…ブラジル人教会とモスクの最大の違いは、前者がポルトガル語を話す日系ブラジル人が中心なのに対し、後者は世界中の様々な国々から人が集まっている。ムスリム同士の交わりが少ないのでは。モスクにおける日本人妻のための勉強会のことを聞いたことがある。ニューカマーといってもこうした違いを理解して調査する必要があるのでは。

小杉…信徒が世界中から集まってくるモスクでの交わりのありかたについては、モスクの性格にもよる。イギリスや日本のモスクの多くのように、地域のコミュニティを基盤としているようなモスクの場合、異言語、異なるエスニシティ同士の交わりは難しい面がある。お祈りはアラビア語で共通だが、学習サークルや説教、そのあと懇談したり食事をしたりするのは言葉が通じないと難しい。しかし留学生がベースになっている大学の近くのモスクなどは英語ができるような人たちが多く、コスモポリタンな性格を帯びやすい。ただイギリスを見ていると、世代が下がると英語が浸透して、あり方も変わってくる。

三木…小杉先生の指摘とも重なるが、留学生を中心とすると

ころは日本語が使えて比較的和気藹々の雰囲気。大阪の西淀川区のモスクでは共通言語が日本語になっている。パキスタン人とスリランカ人が中心で、リーダーシップをめぐり対抗意識も見られる。都心の労働者、社会人を中心とするモスクの場合、まず祈りの場を確保することが先決。モスクの建設にはミナレット、ドームなど内装や外装に費用がかさむ。不況下でそれらがなかなか作れない状況が続いている。

小杉…先ほど紹介したロンドンのモスクは礼拝はアラビア語でそれ以外は英語とベンガル語の併用となっている。

中道…三木先生の講演は「外来宗教はホスト社会といかなる関係を構築するのか」という問題設定であるが、私はドイツに留学していたが、ドイツではホスト社会のドイツの教会が外来宗教とどう関係するか積極的に動いていた。日本ではなぜホスト社会側が外来宗教と関係構築するということがテーマとならないのか。私にはホスト社会に關係構築の責任があると思うが。誰が積極的な媒介者になるのか。日本の宗教者の課題では。

三木…日本のイスラームについては関係を構築する必要は無いとも考えられる。自分が接したムスリムで、モスクに出入りしている人たちは紳士的で立派な方々である。あえて関係を結ばなくとも、そうした信仰をもった立派な人たちがただ近くにいて、それだけでもよいのでは。ブラジル人教会の場合も、信仰者として清廉な生活を送っている。そうした姿を地域の人に見てもらおう。そうした関係のあり方もありではなからうか。ただし、世代交代がそうしたままにとどまることを許さないだろう。

中道への質問…レジメに「宗教間の対話の場は、人間と自然、もしくは人間を含む自然の痛みや悲しみであるべきであり、人間・自然を中心とした神学・宗教学の構築が求められている」とあるが、これについてもう少し具体的に説明を。

中道…まだ考え中の課題である。従来の神学は「神義論」という言葉があるように、どうしても神中心に考えてきた。例えば震災が起こるとなぜ神がこのようなことを起こしたのか、それを擁護するために神が起こしたのはこんな意味があると言った論理の立て方をしてきた傾向がある。しかし神の立場を守るよりも人間を含む自然の痛みや苦しみをテーマにするような神学、それぞれの宗教での教義の構築が我々に今課せられているのではないか。それは神を捨てるとか、人間に都合のいい神学・宗教ということではなくて、キリスト教的に言えば神が造り、祝福された人間や自然をもっと大切に作る神学を考えたいということである。

テーマ全体にかかわる質問…絆の対極に位置づけられる無縁や孤立にポジティブな、或いは宗教的な意味は無いのか。

渡辺…宗教者になるという意識のもとには、どこか解放されたい、絆を断ち切りたい、断ち切らざるを得ない、そういう志向があるのではないか。自分にもそのような部分がある。ホームレスの問題と関わって思うのは、宗教者はしばしば自分の中のホームレス性、魂のホームレス性を自覚させられる。それがホームレスのあり方と共振してゆくような契機となり、社会全体を相対化するなり、水平の絆を周縁の部分から問い直していくような視点の確保に繋がってゆく、そうした創造的な側面が

ある。ただし、中下大樹という僧侶がいて、二〇〇〇人ぐらい無縁死の現場に立ち会っている。彼が言うには、その現場に立ち会ったとしてもそのあり方をいいとは言えない。現代では葬儀は葬儀社が用意しておこなっているもので、実際に死と出会うという体験が僧侶自体にも希薄化してきている。しかしそこでは死体が溶けて、腐臭がして、どうしようもない状態に立ち会わされて、その中で弔うことの意味が問われる。それはただ理念的に無縁がいいとか、周縁性がどうかとかといっているのでは済まされない、決定的な問いかけをつきつけてくる経験である。

小杉…人生の考え方として繋がるほうがいいとか、或いは自立がいいとかあるとは思いますが、私の知る限り、イスラムにとつて後者は無い。イスラムでは人は繋がるものだというのが基本で、その同胞性とは、日常性のレベルに落とした時には、一緒にいるということ。先ほど出た葬儀の話に絡めて言えば、墓地まで遺体を担いでゆく時、棺は重いので運ぶのが大変だが、誰とは言わず通りかかった人でも時間があればどんな人か列に入ってきてかついで行くといったことが見られる。エジプトに留学中、現地の大学の友人に会っていた際、これからどこかに出かけると話した。日本ではそこでさよならと言うことになるが、わかりました、それなら一緒に行くと言われた。一緒に行くといっても別に目的は無い。つまり一緒にいることが友情、友情とは一緒にいることであるみたいなことがある。つまりイスラムの世界では一人がよいという価値観は存在しない。いい悪いは別にして、イスラム圏ではそれは宗教でないという議論

になる。

テーマ全体にかかわる質問・宗教の創りだす絆というものをどう捉えるかについて、実体的なものと捉えるか、関係的なものと捉えるかで評価が違ってくるのでは。例えば震災の支援活動において宗教ならではということ、地域共同体や伝統文化への密着、利他性に支えられた機動力、全国的なネットワーク、死に向き合う作法などが挙げられている。しかしそれ本當に宗教にしかできないのですかと言われると、引つ込めざるを得ない。あまり宗教とか宗教ならではというのを実体的・本質的に捉えず、絞り込みすぎると、宗教性のもつ豊かさや広がりが見えなくなってしまうが、それはもったいない。今回の先生方のお話はどちらかというと関係的に宗教の創りだす絆について語られたという印象だが、この点についてどう考えられるか。

中道・豊かな宗教性、宗教ならではと言われる際の「宗教」とは何を指しているのかという点が気になる。震災の被災者支援で宗教ならではと見なされることで、キリスト教の側から見ると、仏教の方がうらやましいなと思うところがある。そこで儀礼が地域の生活や文化に根付いていて、受け入れられているということの中に宗教ならではということが窺われる。今まで文化が育んできたもの、日本人に染み付いたものが非常に有効に働く場面が多いにあるのではないか。それではキリスト教ならではというのは何がされているのか私の課題でもある。ただグローバルな時代の中で、それぞれの宗教が新しい形を打ち出してゆく可能性もあるが。

渡辺・福島県のいわき市で見たことだが、天理教のボランティアが地域に入り、地域の復興にかなり貢献して、地域の人たちに受け入れられた場面がある。特に信仰も何もしていないが、困った人にとにかく一生懸命親身になって世話を焼き続けている一人の地域の区長さんがいて、その人との出会いから地域に入ることができた。天理教の人たちと話していて、彼らは信仰を持っていない区長の発言や行動にもものすごく感動する。そしてその人に対して感動するだけでなく、自分たちは天理教のおたすけの精神や理念を持っているが、それへの問いかけが彼を通じてされていく。宗教的な覚醒が非信仰者との出会いによって経験させられていく。一方で現地の非信仰者の人たちにとっても天理教のボランティアにびっくりしている。彼らは宗教的な支援、心のケアなど特にはしていない。ただ頼んだら一生懸命丁寧にやってくれる。そういう出会いだけ。彼らは決して宗教性を表に出していない。しかし今の若者たちの中でこんなに一生懸命行動する、しかも行動して恩に着せない、何かした後には仕事を与えてくれてありがとうと言って帰っていく、日本社会の中にこんな気持ちのいい若者たちがいるのかと感動して天理教本部に行っている。そういう出会い方をしている。ここではこれが宗教だというプレゼンの仕方ではなくて、ただ求められることを一生懸命するだけ、しかし向こうからサポート・カルチャーを支えてきた宗教は何かという問いかけが生まれ、宗教性が浮上してくる、そうした関係ができていく。そういうことではないか。

(要約 第七〇回学術大会実行委員会)